

平成22年6月4日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20720032
 研究課題名（和文） 室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究
 研究課題名（英文） Research on the Religion Arts of the East Asia mainly on the Buddhist Paintings of the Muromachi Period
 研究代表者
 畑 靖紀（HATA YASUNORI）
 独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部企画課特別展室・研究員
 研究者番号：80302066

研究成果の概要（和文）：

従来、東アジアの宗教美術研究において室町時代の仏教絵画は研究対象とされる機会が非常に少ない分野であり、その基礎的な調査研究の成果がまとまって公刊されたことはない。

この研究動向に対し本調査研究は、当時の日本文化を先導した政治権力者や有力寺院、具体的には主に足利将軍家が関与して制作・受容された仏教絵画を中心的な対象として取り上げ、考察を行った。さらに、これに影響を与えた宋・元・明時代および高麗時代・朝鮮時代の仏教絵画をも比較対象として視野に入れ、それらの造形的・文化的な意義を、中国・朝鮮を含めた東アジアの宗教美術のなかに位置付けた。

研究成果の概要（英文）：

In the religion art study of the East Asia, there are very few research results of Buddhist paintings in Muromachi period conventionally. Fundamental research of Muromachi Buddhist painting has not been published.

Against this trend of study, this research consider Buddhist paintings produced by an influential politician and temple who led Japanese culture and art, such as Ashikaga shogunate family.

Furthermore this research examined the Buddhist painting of China and Korea, and placed cultural significance of Muromachi Buddhist painting in the religion art of the East Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：室町時代、仏教絵画、東アジア、宗教美術、足利将軍家、明兆、雪舟、観音図

1. 研究開始当初の背景

東アジアにおいて仏教を中心とする宗教主題の美術がながらく制作されてきたことは、文化史上に大いに注目すべき事象である。なかでも仏教の信仰があつた日本では、数多くの優れた宗教美術がのこされ古代より今日に至るまで伝存するため、世界的にみても注目すべき地域であると位置付けられる。

しかし日本の宗教美術の研究に目を向ければ、表現の優れた作品の多い平安・鎌倉時代などの仏教絵画・彫刻については今日まで多くの研究があり成果が公刊されているものの、それ以降の時代やそれ以外の分野（工芸など）の研究は必ずしも盛んに行われているとは言えず、時代や分野の観点から成果に大きな偏りが存在していた。

この動向に対し彫刻の分野では近年、研究成果が続々と公刊されており、中世後期および近世の宗教彫刻が造形および文化の側面から考察の対象とすべき存在であることが認められてきており、新たな研究の段階を迎えている。

しかしながら絵画の分野では研究動向は異なる様相をみせており、仏教絵画に詳しい研究者は一般的に室町時代の作品を積極的には考察の対象としない傾向がある。そのためこの時代の仏画は、水墨画の一ジャンルあるいはやまと絵の一主題として取り上げられ、個別の作例を説明する試みがみられる程度であり、それらに関わる基本的な問題を総体的に解明しようとする問題設定はみられなかった。ここには時代別あるいは主題別、ジャンル別に対象を選択して研究の領域を限定することの多い日本絵画研究の傾向に起因する問題が構造的に認められると言えよう。

以上のような研究状況に対して代表者は著書（共著）『仏教美術事典』（東京書籍、2002年）の執筆以降、室町時代の仏画が上記のような理由によって研究対象とされない動向に問題意識をもってきた。

また十年来研究を継続している室町時代の画僧・雪舟についても論文「文明十八年の大内氏と雪舟」（『雪舟等楊—「雪舟への旅」展研究図録』、山口県立美術館・雪舟研究会、2006年）を公刊しており、室町時代においても仏教絵画の制作がパトロンとの関わりから重要な歴史的意義をもつことをすでに指摘していた。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ代表者は、当時の日本文化を先導した政治権力者や有力寺院が制作・受容した品質の優れた絵画作品を対象として選択し調査研究を進めることとした。

とくに本調査研究においては室町時代の仏教絵画、なかでも特に足利将軍家が制作・受容する作品を中心的な対象として考察し、その室町仏画に影響を与えた宋・元・明時代および高麗時代・朝鮮時代の仏教絵画をも比較対象として視野に入れて、それらの造形的・文化的な意義を中国・朝鮮を含めた東アジアの宗教美術のなかに位置付けることを目的とした。

その研究対象の第一は、足利将軍家が関与する寺院における造像である。なかでも禅宗寺院では表現に優れかつ巨大な規模をもつ観音図や羅漢図、涅槃図などが現存しており、室町時代の仏教絵画を代表する作品として注目される。具体的な作品の画家としては明兆を取り上げ、足利義持の関与が想定される明兆筆三十三観音図（東福寺）や大規模な連幅として注目される五百羅漢図（東福寺）などの代表作を考察の対象とし、その表現や図像について中国絵画・朝鮮絵画の観音図や羅漢図との比較検討を行い史的な位置付けを解明する。

第二の研究対象は足利将軍家の邸宅で用いられた宗教絵画である。足利将軍家の邸宅における宗教儀礼については近年、中世史・建築史の分野で関心の高まりがみられる。これに加え、代表者の論文「室町時代の南宋院体画に対する認識をめぐって—足利将軍家の夏珪と梁楷の画卷を中心に—」（『美術史』第156冊、2004年）によれば、当時の中国文物の評価・意義付けを規定する典型的な受容の場であった会所の唐物飾りにおいても仏教絵画が中心的な役割を果たしていることが明らかである。このような先行研究に基づき、特に儀礼と目的に注目して足利将軍家の邸宅における仏教絵画の意義付けを究明する。

なお足利将軍家の関与する造像については、会所や寝殿での儀礼にうかがえる故実を踏襲して総合化する包括的な文化政策と同様の傾向が、宗教政策や造像の多様性についても考察されるものと予想される。

3. 研究の方法

2008年度は本調査研究の趣旨に沿って次の二つの問題を設定し、下記の方法によって研究した。

(1) 東福寺の画僧・明兆の作品のうち、足利将軍家の関与が想定される三十三観音図(東福寺)の図像と表現を考察し、類例と比較して検討する方法によって基礎的な知見を得た。

(2) 三十三観音図の造像目的を考察した。とくに足利将軍家をめぐる時代状況を分析し、かつ東アジアの観音変相図を検討する方法によってその歴史的な意義を考察した。

2009年度は本調査研究の趣旨に沿って次の二つの問題を設定し、下記の方法によって研究した。

(3) 足利将軍家が所蔵した中国仏画に注目し、これらに対する歴史的な認識を考察した。その陳列方法を分析することを通じて、室町時代の道釈画に対する意義付けについて知見を得た。

(4) 新出の『印譜集』(ハーバード大学燕京図書館蔵)を調査した。中国仏画に依拠して絵画を制作した室町時代の水墨画家に関する基本資料を収集した。

4. 研究成果

2008年度に研究対象とした(1)明兆の三十三観音図(東福寺)の図像については、典拠とされる『出相観音経』洪武28年(1395)版を検討し、さらに伝雪舟筆観音図(九州国立博物館ほか)や鶴洲筆木庵・高泉・千呆賛観音変相図(東京国立博物館)、朝鮮仏画の観音三十二応現図(知恩院)と比較をすることを通じて、その図像および表現の特質について具体的な知見を得た。

また(2)本図の造像目的について同時代の足利将軍家をめぐる状況を文献から検討し、加えて伝雪舟筆観音図や観音三十二応現図に関する先行研究なども参照しながら、信仰の側面から作品を理解するための基礎的な資料を収集した。

なお以上の研究成果を周知するため、上記作品のうち数件を含む仏教絵画を、代表者が企画担当した九州国立博物館文化交流展示トピック展示「変化する観音」において公開した(「5. 主な発表論文等」「その他」の「ホームページ等」九州国立博物館文化交流展示トピック展示「変化する観音」http://www.kyuhaku.com/pr/exhibition/exhibition_pr_e34.htmlを参照)。

2009年度に研究対象とした(3)足利将軍家所蔵の中国仏画に対する室町時代の認識

については、会所における陳列の方法を分析し、その意義付けを同家の対外関係を重視する政策との関わりから解釈して、仏画を中心とする唐物飾りに対する評価・意義付けを考察した。その成果の一部を「5. 主な発表論文等」「雑誌論文」の⑤「会所と影供の掛幅—日本中世を飾る作法」(『巨大掛軸をめぐる文化交流』、九州国立博物館、2010年)として公刊した。

また(4)室町時代の水墨画家に関する基本資料については、新出資料である『印譜集』(別名『日本画工落款模写集』、ハーバード大学燕京図書館蔵[Harvard-Yenching Rare Book Tj64196511])を調査研究した。本資料はアーネスト・フェノロサ(1853~1908)の手稿であり、朝岡興禎(1800~1856)の『古画備考』とともに日本絵画史に関する研究資料として重要である。とくに室町時代の画家に関する記述が多く、室町水墨画の研究における基本文献とみなされるため、これを調査研究したことはとくに大きな意義があると考える。

なお本資料に関する考察については、次年度以降に逐次、研究成果を公刊していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

① 畑靖紀、会所と影供の掛幅—日本中世を飾る作法、巨大掛軸をめぐる文化交流、査読無、2010、77-77

② 畑靖紀、瓢箪のある情景—瓢鮎図の描写について、特別展京都妙心寺、査読無、2010、77-77

③ 畑靖紀、雪舟の中国絵画に対する認識をめぐって、寧波の美術から海域交流、査読無、2009、187-197

④ 畑靖紀、須賀みほ、渡辺雅子、相澤正彦、金井裕子、北野天神縁起絵巻シンポジウムディスカッション、『国宝天神さま 菅原道真の時代と天満宮の至宝 関連イベント講演収録集』、査読無、2009、170-178

⑤ 畑靖紀、渡唐天神、特別展国宝天神さま、査読無、2008、135-135

〔図書〕（計1件）

①辻惟雄、泉武夫、畑靖紀他執筆（共著）、
新書館、日本美術史ハンドブック、2009、
78-79・82-90

〔その他〕

ホームページ等

http://www.kyuhaku.com/pr/exhibition/exhibition_pre34.html

九州国立博物館文化交流展示トピック展示
「変化する観音」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

畑 靖紀 (HATA YASUNORI)

独立行政法人国立文化財機構九州国立博
物館・学芸部企画課特別展室・研究員

研究者番号：80302066